

「話すこと・聞くこと」領域における、小・中の学びをつなぎ、思考力を育む指導の工夫  
～小中交流授業による協働的な学びを通して～

郡山市立湖南小学校 福島県教育センター長期研究員 瀧田 和也

## 1 研究の趣旨

国立教育政策研究所（以下、国研）等の先行研究に基づき、「思考力」を中核とした、基礎力や実践力にもつながる資質・能力の育成が望まれている。21世紀を生き抜く子どもたちに求められる「思考力」として、問題解決に向けて一人一人が自ら学び判断し、自分の考えをもって他者と話し合い、自他の考えを比較・吟味して統合し、よりよい解を見いだす力、さらに、新しい知識を作り出し、次の問いを見付けるような力を身に付けさせることが大切である。そのためには、教科等を貫く視点や小中9年間を見通した実践等、教師の意識改革が重要であると考えられる。

教科を貫いて9年間の学びや系統性を見通し、授業改善を図る視点として、在籍校（施設一体型小中一貫校）における小中交流授業実践からの成果に着目した。具体的には、「個別→相互交流→個別」や「受信→思考→発信」の学習過程を重視すること、言語活動が思考力や表現力の基盤となることに対する小中教員の共通認識をもつことである。在籍校でも重視してきた、子どもたちが他者との対話を通して協働的に学ぶ姿は、先述の「思考力」の内容と重なる。

国語科においては、特に、対話を支える「話すこと・聞くこと」領域での学びを充実させることが、教科等を貫いて汎用的に「思考力」を育成する原動力になると考えた。県内でも小中一貫、連携教育の推進が予想されるが、距離などの物理的な要因により、小中連携が停滞している現状もある。今後は、施設一体型一貫校での実践知に基づき、施設分離型一貫校でも活用可能な具体的な提案が必要である。それが一貫校のみならず、県内の小中学校全体の学力向上につながることを考える。そこで、本研究では、以下の仮説を設定し、小学校と中学校との接続期に焦点を当てた小中交流授業を行う中で、「思考力」を育む指導の在り方を探りながら、本主題に迫った。

「話すこと・聞くこと」領域の小中交流授業を中心として、以下の視点に基づいた手立てを講じ、協働的な学びを展開すれば、児童生徒の学びをつなぎ、思考力を育むことができるであろう。

【視点1】 育みたい「思考力」の共通認識（教師相互）に立った単元構想

【視点2】 「話すこと・聞くこと」領域の交流授業の単元展開の工夫

【視点3】 学びを振り返り、学び方を自覚する場の設定

## 2 研究の概要

本研究における「思考力」を以下のように定義し、研究を進めることにした。

課題（問題）解決を行う場面で、既存の知識や経験を基に関係付けを行ったり、知識の再構成や新たな関係性を見いだしたりしながら、新たな知を創出する力。

- (1) 【視点1】「育みたい『思考力』の共通認識（教師相互）に立った単元構想」について
  - ① 「Z型授業構想図」に基づく単元構想をSECIプロセス（共同化・表出化・連結化・内面化）に細分化して見直すことで具体的な手立てを明確にする。
  - ② 「思考力」育成に焦点を当てた小中教員協働による単元構想により、身に付けさせたい「思考のすべ」の焦点化と、効果的な交流の場の位置付けを図る。
- (2) 【視点2】「『話すこと・聞くこと』領域の交流授業の単元展開の工夫」について
  - ① 思考ツールによる自他の思考の可視化・操作化を通して、「思考のすべ」の自覚化を促し、児童生徒相互の思考を整理できるようにする。
  - ② 同学年交流と異学年交流を効果的に位置付け、「話す・聞く」活動と「書く」活動を連動させた単元展開にすることで、個別に考える場と、対話を通して一人一人が学びを深める場を確保し、「共同化・表出化・連結化・内面化」を繰り返しながら、思考力の強化・向上を図る。
- (3) 【視点3】「学びを振り返り、学び方を自覚する機会の設定」について
  - ① ルーブリックに基づいた相互評価を通し、自己モニタリング力やパフォーマンスの向上を図る。
  - ② 記述による学びの振り返りと累積を大切に、タブレットも有効に活用することで、「共同化・表出化・連結化・内面化」の各段階での自他の思考を振り返り、価値付けられるようにする。
  - ③ 同学年交流と異学年交流の各段階ごとに、振り返りの場を位置付けることで、行動的な内面化を促し、集団と個の相互作用による新たな知の創出につなげられるようにする。

## 3 成果と今後の課題

- (1) 言語と思考との関係性に関する教員の共通認識を促進するモデル図の活用（SECIモデル）
  - 「受信→思考→発信」「個別→相互交流→個別」というプロセスに加え、「共同化・表出化・連結化・内面化」をスパイラルに繰り返す中で、個別の知が集団の中で増幅されるイメージを、小中学校の教員が共有しながら単元を構想・展開し、振り返りにつなげることができた。
- (2) 振り返りの場の充実による、深い学びの実現（目標と指導と評価の一体化）
  - ▲ 深い学びの実現のためには、学びを説明・評価したり、思考を深め活性化させたりする語彙を豊かにすることが大切である。「ルーブリック」「思考ツール」等の手立てをSECIプロセスの中で有効に機能させ、自他の学びをメタ的に振り返る場をいかに充実させていくかが課題である。